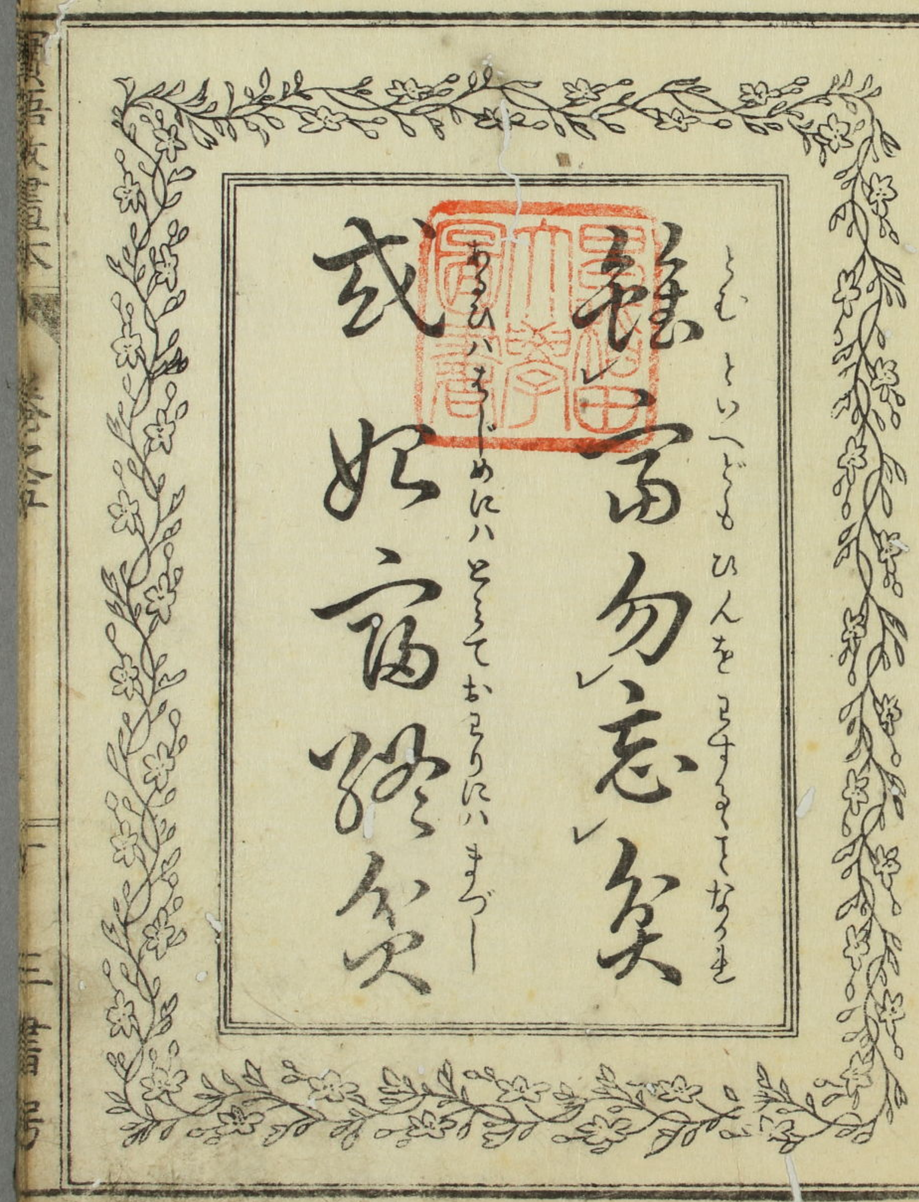
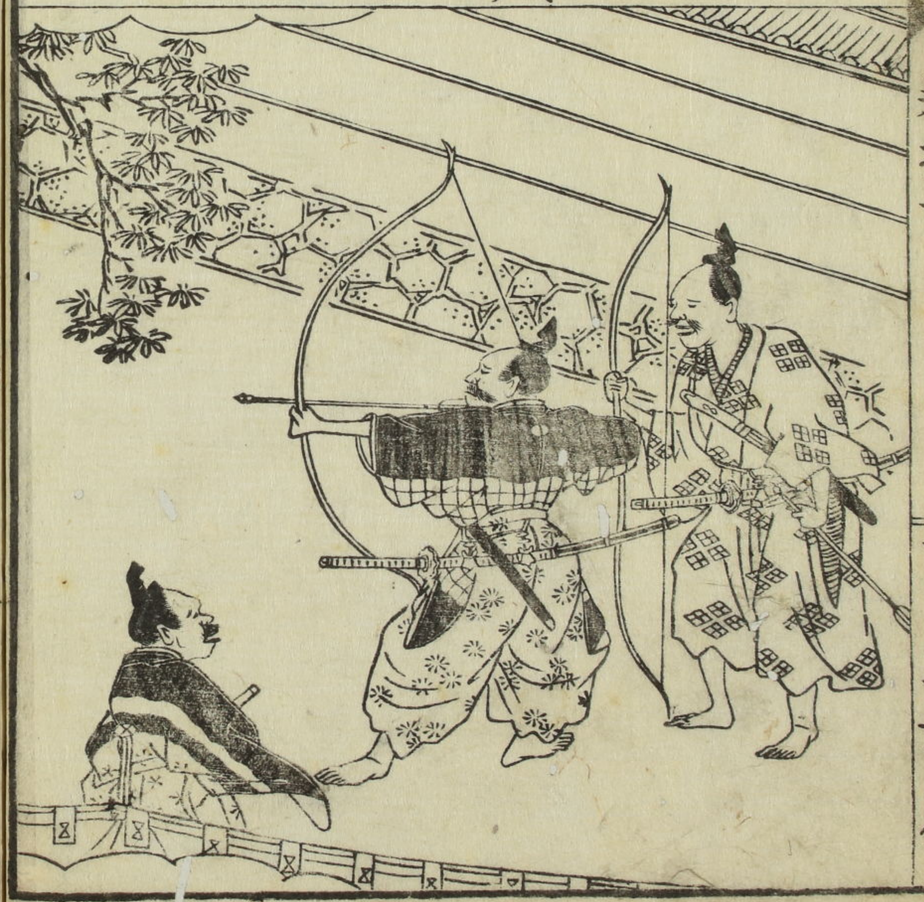
六論教恵録
五
ロ 9
4084
5

門口9
號4084
卷5



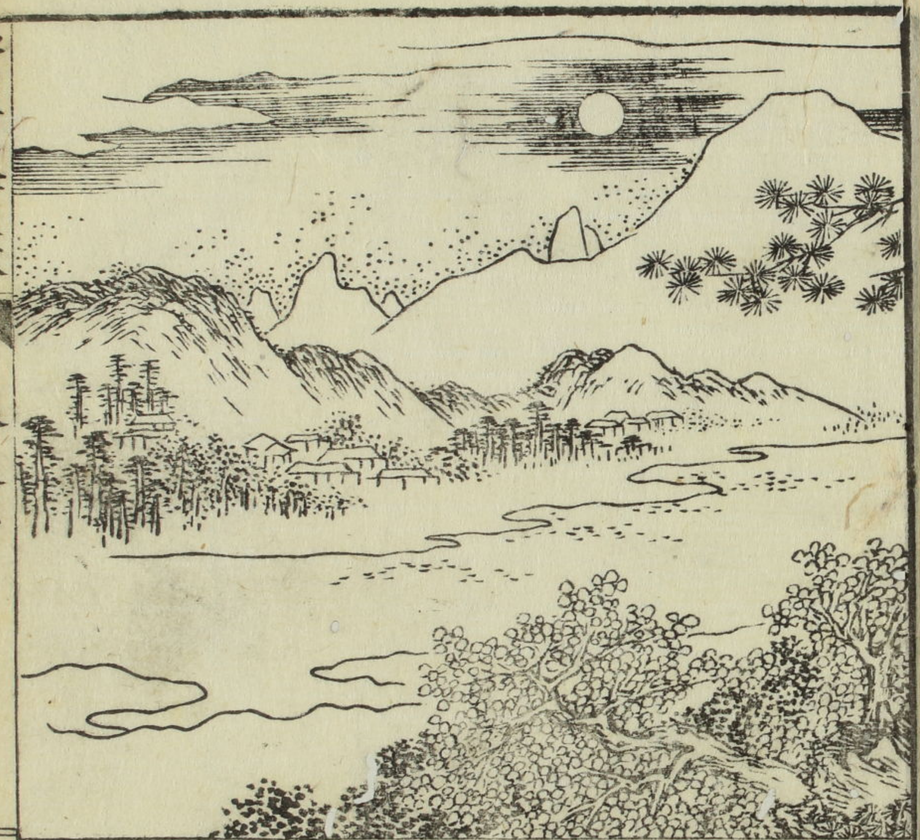
昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

劔ハ鞘弓ハ袋ふ
おさめりし清代に
ても礼を忘れ
ざるハ聖賢のお
しえなりとぞ考
身に飢饉ぞ忘
ぜざれバ米粟餘
まるべし分すと
ゆにして病をわ
すれざれバ永く
堅固なるべし

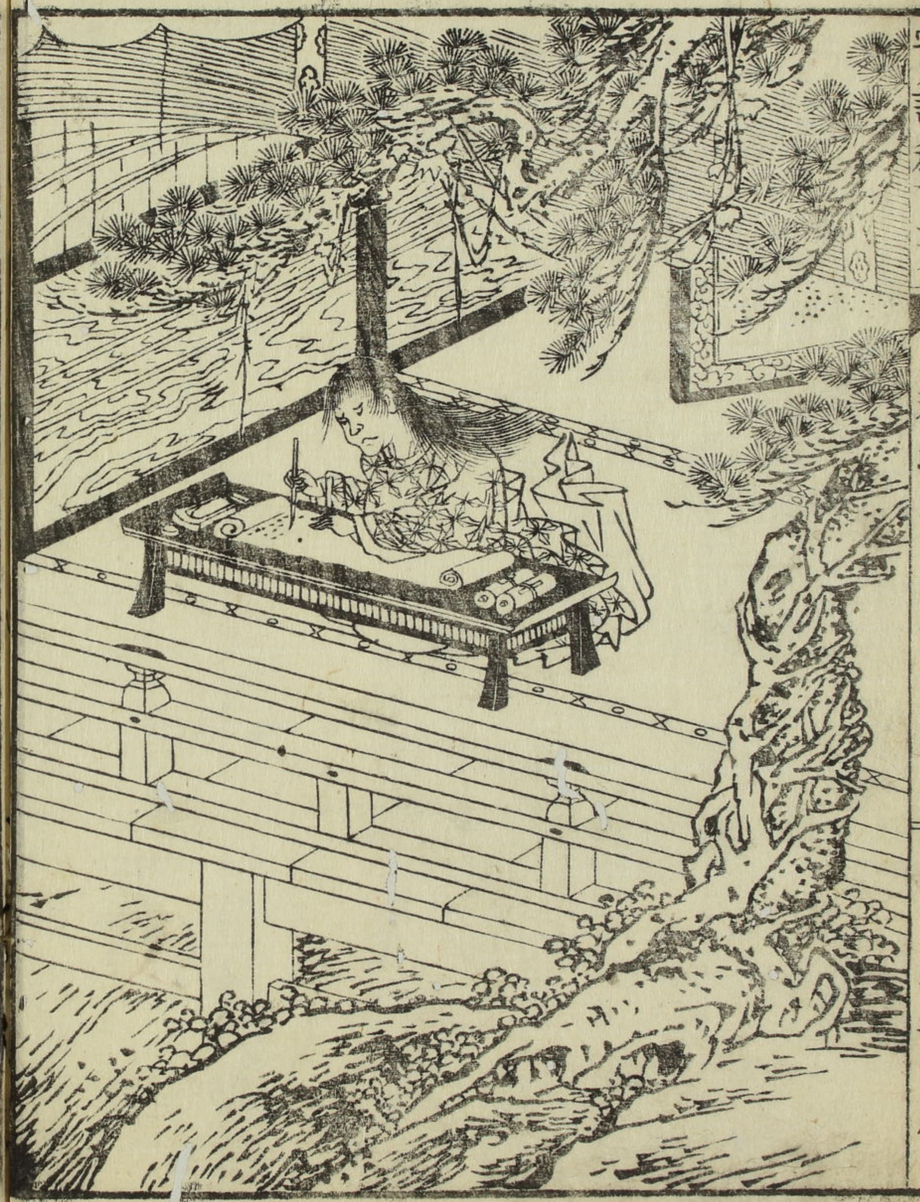


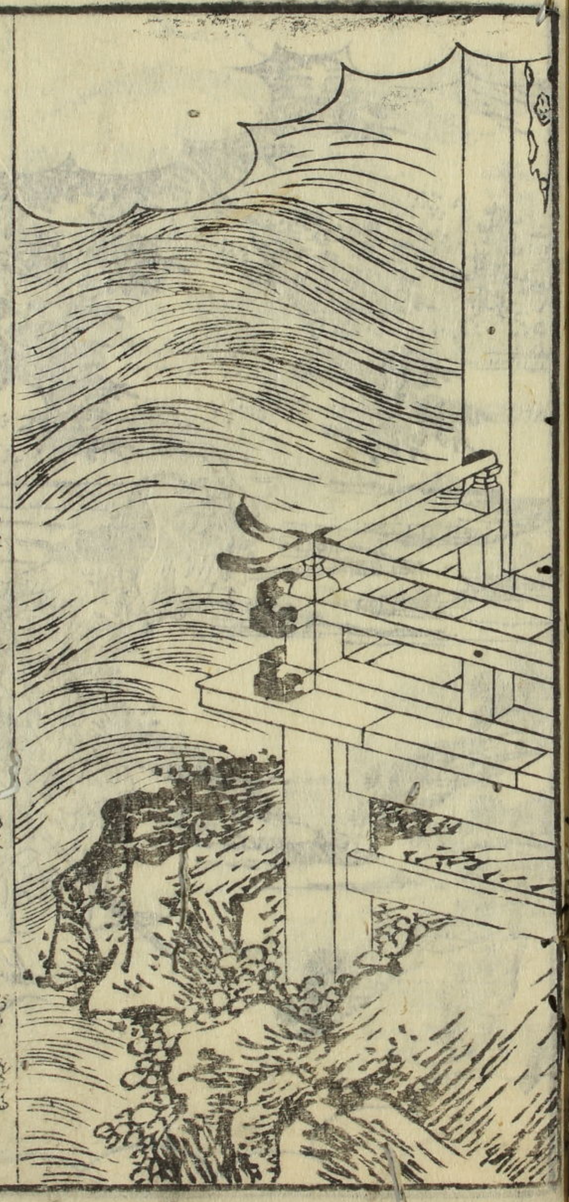
天地の間にあ
ゆること
すべからく
この理を弁
ずるなり
商小富者も
多大勝城
ずする
学ざれ
ばなり

月に盈虧の虛實あり
日ふ宅異北往來始り
何ぞ人の分乃とこしなへに富貴あるゝんや如人
も富貴と貧賤とい
あぶるの雲のごゝ
としいつかる世のさ為も
弁へざる若き人の先
祖より傳へる財寶
を已が侵に費し捨
て世渡るたつぎさへ
なく猶淫蕩が宿に
むゝしとものども往
昔親しうしとも



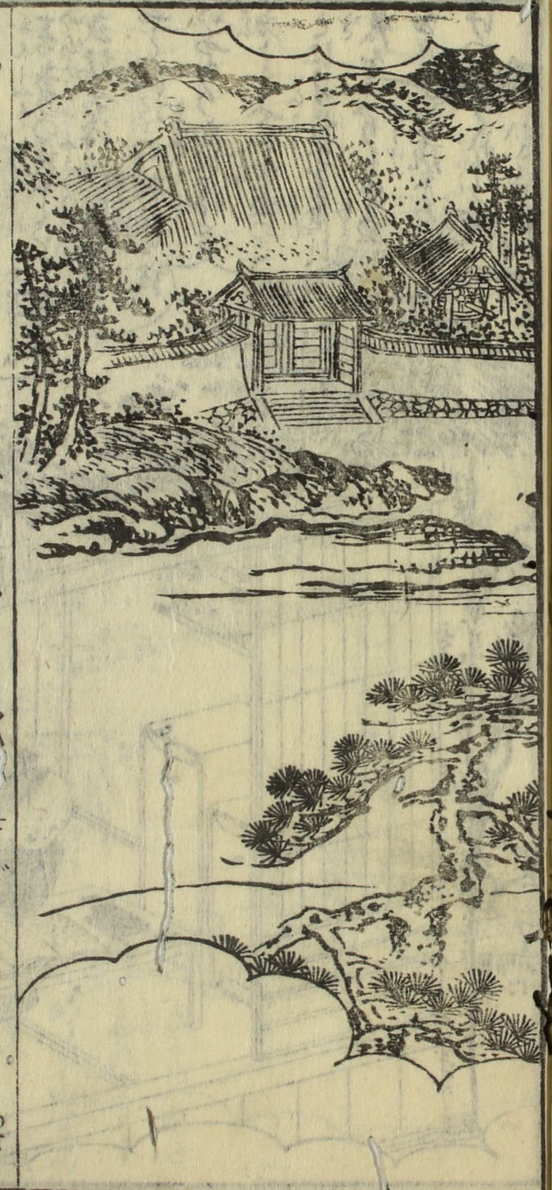
どちも人今ハ和び部
にいくさくなさで余
ほくしをつくさく
ろろかるゝと昭れど京
末おのゞ癖ある性り
かくるゝり牛なれバ
ほとずりしてもあぶ
もき甲斐さにな
家て
貧ふを
わすゝ
こゝ
ろれ





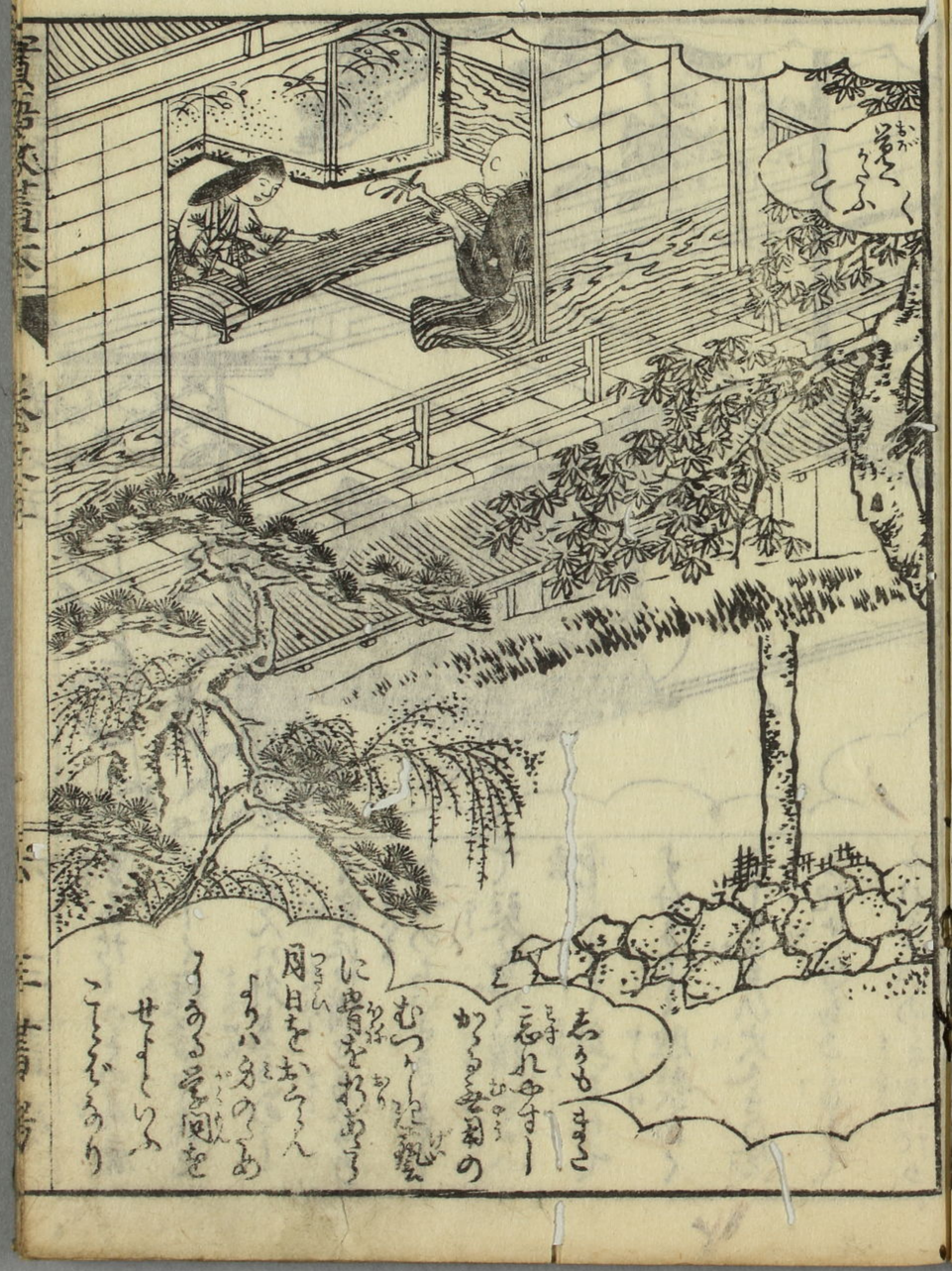
雖貴勿忘賤
たつときといへども中ゐを忘るべからず
或先貴後賤
あるひはまづたふとくあとにいやしくなる

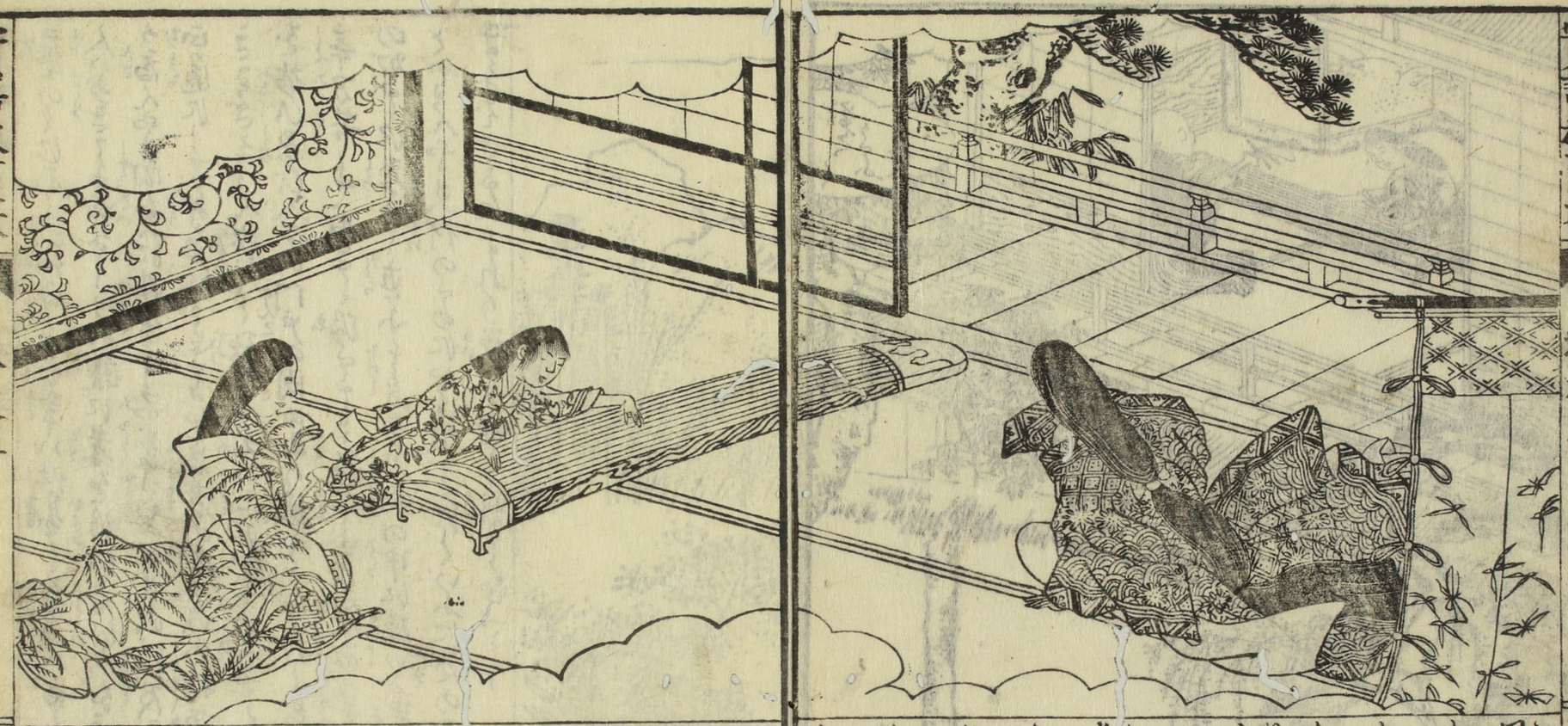
位高く富おりしかども人をいやめ自ら驕こ
なれとなりそるさてし天のまして学ぶ徳院ハ
清政乃高位に持れ供御さへそのる人
なく綜しくて終りなふ徳のるきハたのむ
屋しかしきとハ形むべくべし



貌美艶なれども形心醜くして小野小町も年老て分関寺に食をもとめ遠さをもたのむにたゝず鼎を素し項羽も九里山の戦ひ破れ自刎て孔世りその昔孔丘楠公資ある人も亡る武仲達が英人に世を奪れ秦の始皇豊太閤乃高名も槿花の二世まゝ滅びぬ冨ある人を羨ぐ半ばかこるこゝなれ位ある人を羨ぐ半ばかこる

夫難習易忘
音穀之浮才
亦易學難忘
書筆之博藝
蒿素の藝とふく武藏武場宮浮弱程のたゞひのやくにたゝぬ柱藝成
いつのゝ加に浮くるかしいくも盃のことに才貌を夢し
俗をいりその盃をきさ柱藝をけつくなゝひゝさ


くまくふして
あるもまさに忘れやすし
かゝる書籍のむつかしき藝に書をわかつ
月日をおくり人
ちハ分のあるうるる学問をせすしくふ
こゝろゝ

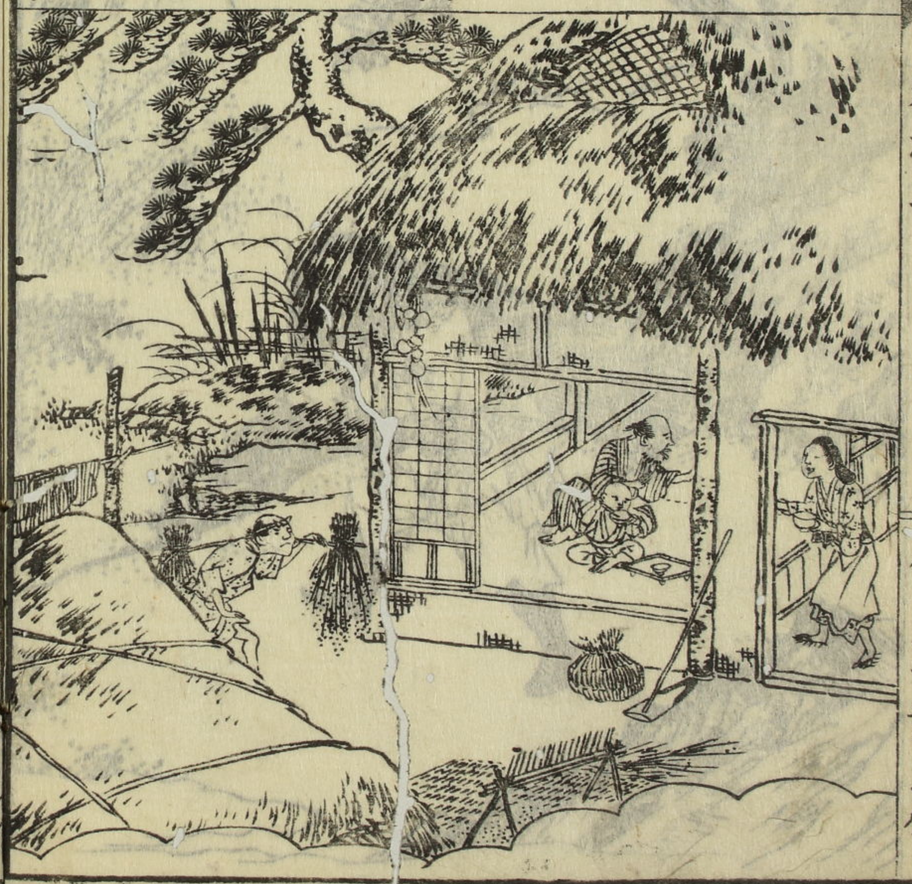


男ゐたり〳〵ハ馬鹿
〳〵く癡漢らしくて
しせんハ外見もあ
く実には惜きさまなり
幼女のちいさきもの
て琴をひく弾さるハ
ゑらく〳〵與ありて
よみまゝ〳〵臉髮あく
まく生ハ実かきたど
と紀大きるるまて
それるひのくを羅たら
く據へさる上に坐り
弱弱ハ星のごく見生
男女ハ稲麻のごく切中
つく〳〵声ゐるくうゝひ三
伝ひ〳〵弾さるる歯の
痛らしかゝ歯ハ星のを
に加ぎ〳〵ひ痛るれげ
いまもるそのくしき
るにそろを
終ー

孟子のたまはく人ハ仕易く事ハ難しかるに世に悪人ハ多く善
人ハおきてそかるゝれ親に孝を尽ひ君に忠をつくしたゝ
ち高人や高賢に親しみ学問をなさば法度をそむく人を
正道にして邪を除くべきを忠孝の人といふ悪人の強ひ
さるべきゝん強ん〳〵強する者ハ上におそれ人をたぶかり智をめぐら
を振ひ多びいるに門戸の固めあり越ん〳〵すれ〳〵云のびがたし
辛苦して世すゝ治るとも上に正しき道あり天に順ひ地に正しく
のがるに乏しく恵ふ事を刀剣の中に踏る豈是を者易き事
といふんや夫何のゆゑにかくのごとくいつたの通るべき理を
ずるべきにより欲くば慎むべし

但有食
有法
亦有身
有命

人分を稟て此世に生れ落るし千代忽に食あり食を喰ふが加に命を保り拵人くせれ食を喰こと人命をたもつものにハ必法あり



法こハ人間一生息のうちふ内につゝあおこのふ而維法度こそ〻も人欲の私ふ引生ふ法を慮るこさハ私こく食にしば〻食ふこさハ命もたふ絶ぬ命おこれバ名よねすべさいこれなり

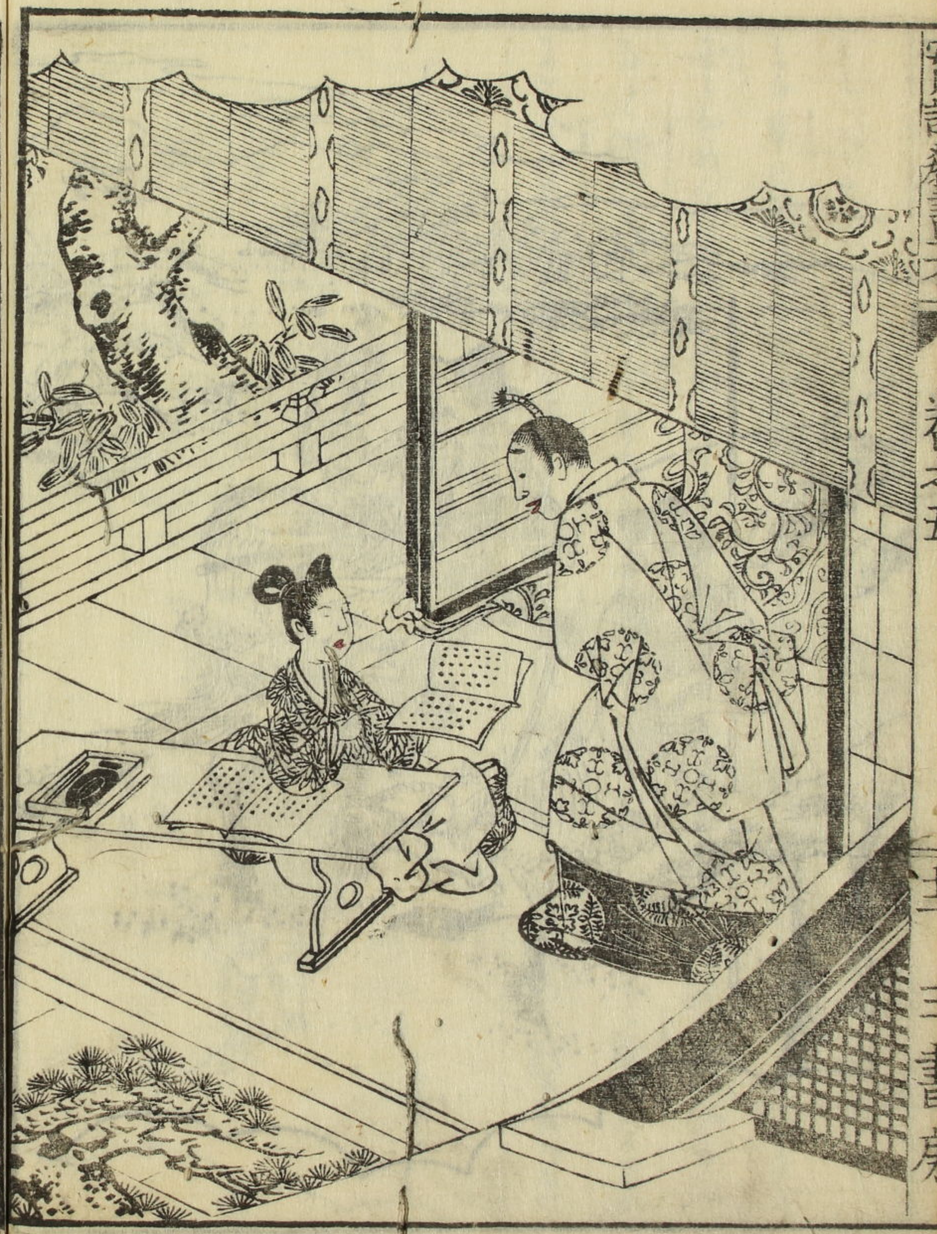
天子孫の人をせずしてこ誰おしえ給ぶ下
母の乳も脊中にあるゝ臥ゐも付さゝ人こハ赤子を書ふに彷ゐあし
かゝゝんふ懐ふいさゝて飲せかげんのよ紀わゞにつさゝるハ天生自然
乃如くゝゝ有かゝる天の恵ゝをうけて生れ出ゝる人ゝゝて命のあゝ
ん加ぞり人倫の道ゞきいゝんれみし皆人欲の私より家業を礼し財宴
をうゝゝゝるひ食禄もつきさゝあさまし紀ゑ食にまゞゝるゝ天
此恵直るゝんにそむくゞあるり能慎て生涯を渡るこゝなるべ

猶不忘農業

必莫慶學問

農業とハ耕芸て五穀及び菜蔬を作る百姓の名目なり食ハ人の命を繋ぐものなれハ官位の貴き人とても農業の切なる働きを忘れまふべし学問ハ分を弁ふる法なれて官位ある人ハ勿論百姓工人といふとも学ぶべしとの意なり

いにしへのかしこき人天下の所に農業のありさまを画せ給ひ
ふかくこゝろ辛苦なることを知しめ給ひ巡狩とゝ天子こゝろ
ふかくをめぐりあひ民のくるしき業のよすあしを糺ひ仁政を
ほどこ深に民ハ国の本なり家ハ国のつゝ猶の役ひしいるも巡狩のこと
まて今の農の稽古ぶり皆民の辛苦を身人に知しむる聖賢のこゝろ



故志代學者
故じとハ代實孫孫のそゞめすりかきつゝ伝ゝるごゝくなれバ
こゝ迄べゝ今の世代道を学人とするものハなん代實孫孫
先可按此書
を見てゝくゝくゝと按吾悪邪正を弁ゝくのちさて聖賢
れ孫ゝを入ゝべゝき学問の
裏場ゝゝの句のゝゝろあり

淚地を穿て刻し
なーしとる人ありて刻字
ゑ寓言なれども学問
のなーがれを延る
すゑ〻さとのいま
めなり故人ゑにん
弐月にて解ー
すく積やすて
去らも分のひひふ
益ある実語教
一巻をつゞく
門に入るのそゞ
めーなーれさ
ぬれどこれをも

つやくゝ学る人
のゑれをいか
うせん加う
絃を絶こと
して児童の
無ゑんこと
をこひ願ふ
聖賢のれーへの
たうれう
のぼりたま
うんかけそ
にもゑん
かー

是學問之始

終身勿忘矣

千里ハ行程も一歩より始む実語教乃淺学なるも
学に入るハはじめなり酒はくるまの甘きに酔りすること
なるを文選にも人而不学如洪川無源若淺虛失識
少しの学問にて徳ふくんハ川をもるる色うしび翼ふくて
宝を見べし汎るをまるびして人ふる者ハあるべし
生涯の吉凶善悪学しく不学しのふるみにあるなり
よくく慎しえ学びゆるを世になひとくなれ

実語教亜本巻之五終

跋

郭氏の樹栽伝ふを見るに或ハ偃して蓋のごとく又ハ
汎乎たる舟ふ似るふ所の樹ハ生ずるに培植を法て
異ふ異の樹を失ふこと無し樹乃本面目にあ
るごとくにして其直形ふ稍もまがることなきて巧拙
枝〻葉〻乃器ふ似るこのゝ樹も枝に伸るとい
ひつるに従て絲にかゝ曲き結ふれて自然を
こゝろ形ふるあるも亦樹乃性質ふ依ふるなり人乃

如て生る者其
財乃如こ愛ふ
孔子云欲
生要の慎
婦ふ与ること
善悪の性と
あるこ云れむ
此二文語まい

耳なれ目あき
わんをとちひび
て山の谷に入るの
ごとく如先世にしく
さんなんてまこと岩乃
孤まろ孤ぞ呂漏にするかの
きてもさてび財欲をとゝふゆゝに形りゆるか
愛に法を師ぐ文法訳をとゝへその觀をひら

て兄弟の教に
して通ずるを
林藪ここの遠まに
ものハひゝかし
半となりく
ひて法のこと

雲ゐ寺ゆかしの春の桜哉　越城
浪ぬれあるくしほ干の雲のこゑ　沈て
鶴鳴ぬ御都武の夕に　培植
春雨に浮もなみの世界哉　欲

辛酉晩冬

篇を選撰

武泰良寫

大阪畫師　法橋玉山

享和二壬戌正月

東都書肆　須原屋茂兵衛
皇都　菊屋喜兵衛
浪華　河内屋太助
今津屋辰三郎
河内屋宗兵衛